

# MPTF 第15回勉強会 撮影部会主催 「ソニー F65、4K は使いこなせたか？」 —東京藝大の学生がプロとともに本音で語る—

中山 秀一

## 勉強会に参加して

去る2月4日、日本映画テレビ技術協会の撮影部会が主催で、「ソニー F65、4K は使いこなせたか？」—東京藝大の学生がプロとともに本音で語る—という、生々しいタイトルの勉強会が開催された。

最近では4K、8Kという数字だけが独り歩きして、持てはやされている風潮である。はたして、これが本当にクリエイティブな映像表現の新しいツールとして、実証と評価がされているのだろうか、という筆者の日ごろの疑問に、いくらか答えてくれる勉強会であった。

そこで、筆者が感じたことを含めて、参加報告をしたい。なお、この勉強会のナビゲーターを務めた荒木氏からも注釈を加えていただいた。

勉強会は、西五反田にあるソニー PCL (株) のクリエイションセンター会議室で、ブレインストーミングの形式で行われた。前に置かれた二卓の長机には、左からナビゲーターの荒木泰晴氏、続いて東京藝術大学映像学科の大学院生3名がパネリストとして並ぶ。

右のテーブルには、今回のテーマになった「CineAlta F65」のメーカーであるソニーの関係者2名と、ソニー PCL の4K/3D 部門の2名が着席している。(別掲の出席者一覧と写真を参照)

なお、東京藝術大学 大学院の映像研究科とは、大学院だけにある学科で、芸大の4年制大学とは継続の関係はなく、独立した

### 〈パネリスト〉

殿村 亮 東京藝術大学大学院 映像研究科  
平野 礼 東京藝術大学大学院 映像研究科  
武田 明 東京藝術大学大学院 映像研究科  
大庭裕二 ソニー(株) イメージング・プロダクツ & ソリューションセクター  
庄野雄紀 ソニービジネスソリューション(株)  
営業・マーケティング部門メディアソリューション営業1部 セールスマネジャー  
諏佐佳紀 ソニー PCL (株) 事業本部 4K/3D 技術戦略室室長  
大場省介 ソニー PCL (株) 事業本部 4K/3D 技術戦略室テクニカルプロデューサー

### 〈ナビゲーター〉

荒木泰晴 バンリ映像 代表 「映画テレビ技術」編集委員

学科である。したがって、日大藝術学部などの4年制を卒業してから、この藝大の映像研究科に再入学する学生も多い。

### 〈勉強会スタート〉

「皆さん、これから上映する学生の作品には、皆さんが意見を言う権利があります。藝大は国立ですから、皆さんの税金で賄われているのです！」というナビゲーター荒木氏の第一声で、このディスカッションが始まった。そして横に並ぶ学生たちを紹介した。質問については、F65は映画用のカメラなので冒頭は映画関連に限る、ということからスタートした。

筆者は、この一声を聞いて、思わず緊張が走り、これは面白い会になるぞと、期待感が高まったのを覚えている。

近ごろ、このような本音で語る勉強会は初めての体験で、日ごろ筆者がもやもやと疑問に思っていたことが、かなりすっきりし納得できる思いであった。

この勉強会は、前述のように、日本映画テレビ技術協会の撮影部会が企画したもので、立案者は、ナビゲーターを務めた荒木氏であると聞いている。

荒木氏は、「バンリ映像」というプロダクションの代表だが、場合によっては無料で機材の貸し出し協力なども行っている会社である。そして、今回の主役たちの東京藝術大学 大学院 映像研究科の、機材管理も担当しておられる。

ということで、藝大の学生たちが実習などに使う撮影機材を介して、普段から学生たちと接しながら面倒を見ているわけである。従って、彼らが日ごろ使いたがる機材の傾向とか、学生たちの映画撮影に対する考え方や、機材の好みなどは、よく知っておられるに違いない。

今回パネリストの席に座っている学生たちの“学生カメラマン気質”についてもよく知っておられるわけで、今回のナビゲーター役はまことに適任であった。



001- 左からナビゲーター荒木泰晴氏、パネリスト殿村亮、平野礼、武田明の諸氏



002- 左からパネリスト大庭裕二、庄野雄紀、諏佐佳紀、大場省介の諸氏

### 《筆者の予備知識》

東京藝術大学大学院といえば、『神奈川芸術大学映像学科研究室』というタイトルの卒業制作作品が印象に残っている。

これは、2013年の「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」で「審査員特別賞」を受賞しており、大変解りやすく面白作品であった。さらにこの作品は、期間が短いながらも一般公開上映を実現している。映画にとって最も重要な、「興業」という洗礼を果たしたということで、注目すべき学生作品だ。

とかく学生映画というのは、自己満足的で、面白くないものが圧倒的に多い、というのが筆者の経験から得た先入観だ。

### 《勉強会の内容》

さて勉強会はまず、パネリストとして登壇している学生2名の作品（各30分）が上映された。この作品は平成25年度5月、9期生（2回生）のオムニバス作品で、共通テーマのタイトルは『Listener（リスナー）』である。

今回上映された作品は、5本から成るオムニバスの中の2作品である。そしてそれぞれのタイトルと撮影担当者は、①山下洋介監督組の『RADIO GIRLS』撮影：殿村亮と、②今野泰恭監督組の『プエルポ アール』撮影：平野礼である。

なお、右端の席にいる武田明氏は、カラーグレイディングの機材セッティングを担

当して、全5作品を把握していた。

上映後、先ずナビゲーターが、会場の参加者の中から、年代別に上映作品の感想を求めたが、各年代とも共通して「よくわからない」「一生懸命やっていることは解るのだが…」という感想であった。筆者も同様に、両作品とも観念的な内容で、かなり難解な作品だと感じた。

（注：難解ではなく、「下手」というのが真相。当初は15分で仕上げる課題だったが、30分になってしまったようだ。短編なら楽にできる、という感覚は間違い。短くてもテーマがはっきりした、訴求力のある作品を創ることのほうが、本来は難しい。荒木）

全体的な印象としては、ほとんどが、カメラの使い勝手など、カメラの操作の話題に終始していたように思う。カメラマンとして重要な、担当した作品のテーマの映像表現を如何にしたかという話題が、ほとんど出なかったのが残念であった。

（注：今回のテーマはF65の使い方、ひいては4Kの状況を議論するセミナーで、映画の内容を議論するつもりはなかった。映画の内容になると監督批判続出になることが判っていた。荒木）

監督はもちろん学生だと思うが、山下組とか今野組とか、監督の名前を冠したチームの呼び名を使っており、撮影所のプロの世界に憧れるのは、誠にけなげなこと、その気持ちは解るのだが…。

参加者たちとの質疑では、彼らの映画制作で監督は絶対的な存在であり、同じ学生仲間でも気安く意見が言えない、という雰囲気のように、筆者としては感じたのだが、如何なものだろうか？

筆者が学生の頃は、監督志望の学生と撮影を志す仲間たちは、いつも対等に、学生同士として共感しあったり、議論したり、飲んだり遊んだりしていたもので、そこから何か創造的なものが生まれたように思う。今の学生たちは、その点どうなんだろうかと、少々不安に思った次第だ。

### 《質疑応答》

質問のやり取りについては、筆者の記憶をもとにして要約した。質疑の当事者名は敢えて明記しないで「☆印」としてある。なお、筆者の印象と荒木氏から頂いた注釈も加えてある。

☆近ごろの若いものは、シャープに撮りたがらない、ぼかしたがる。

☆同感だ、ある若手の撮影担当の事例だが、作品全体にディフューザーを効かしている、広いロングショットなどはボケのため、映写のピンボケではないかと思ったことがある。

☆ディフューザーの効果と解像度の問題とは異なる。ディフューザーのボケには芯があるので、ピンボケとは異なる。2Kよりも4Kになれば、ディフューザーの効果はさらによくなるはずだ。



003- ディスカッションを盛り上げるナビゲーターの荒木泰晴氏



004- 満員の会場

☆学生たちは、やたらとフォーカス送りをやりたがるが…。

☆上映された作品の場合、デイシーンのワイド画面で、グループの人物がカメラから走って遠ざかるショットでは、フォーカス送りが遅れてしまい、ややボケが残ったままカットが変わる事例があった。

配られた資料（映画テレビ技術誌 2014 年 10 月号）にもあるが、オープンロケでも、シボリは ND などを使って F5.6 程度に開けて撮影しているようだ。これでは被写界深度が浅いので、ピン送りが難しいと思う。（注：屋内は F2.8 から F4 程度）

☆4K で撮ってブルーレイで再生するとはどういう訳か。4K は 4K の再生で見てこそ意味があるのではないか。（注：これこそが今回のテーマ。全てのプロセスを 4K で仕上げないというのは、プロでも同じことをやっているのが現状。それはなぜか、を考えるセミナーは今まで無かった。荒木）

☆今回の作品は、撮影素材の全てを 2K に落として編集を行っているという。

☆今回の会場で上映したモニターは、84 インチで、4K 対応だと思うが、ブルーレイで再生している。上映素材は、2K に仕上げたものである。

☆撮影現場で、監督がフレームを決めたがる、監督の仕事は、役者の演技を見る事ではないのか。

#### 《ワンカム押しとスルー撮り》

☆監督は、撮影前にカット割りのコンテニティを作っているのか。

☆学生監督は、そのシーンをカット割りせずに、スルーで芝居をさせ、それを、カメラアングルとポジションを変えて何回か繰り返し撮影し、その素材を編集で一本化する。

したがって、記録データが膨大な量になってしまうという、大きな問題がある。

撮影の前に、頭の中のイメージで、カット割りをするという習慣が無いようだ。一応は、カット割りのイメージを持っているようではあるが…。

さらには、繰り返しスルーの演技が、テイクごとに変わってしまっ、つながらなくなるということも懸念される。

☆役者には演技をしてもらっては困る、演技らしくないように演じてほしい、というのが若い監督に共通した傾向のようだ。あるテレビ出身の中堅監督との懇談で、「報道は本当のことを本当らしく見せる事、ドラマはウソを本当らしく見せる事だ」。「したがって、役者には徹底的にリアルな演技が求められる」と言う。

スルー撮りは、うまくいけば、自然な演技、自然なつながりが得られると思う。（注：役者の技量に頼ることになり、何のための監督か判らない。荒木）

☆ハリウッドでも、作品によっては、多数のカメラを用意して、テレビのようなマル

チカメラ撮りをしている、という話を聞いたことがある。まるでフラッシュカットの連続のようなカットの多さを見ると、さもありなんとと思う。

☆今撮ったショットが明らかに NG の場合、ワンプッシュボタンで、データをその場で削除することはできないのか。

☆それは、誤消去という危険があるので、今のところ設計では考えていない。（ソニー）

☆確かに、不要な収録済みデータを減らす効果があると思うが、若い監督には、今撮ったショットが本当に NG なのか、削除する決断ができないのでは…。編集のときに見てから、OK ショットを決めたのではないだろうか。（注：コンテで事前の決断ができていないのが問題。荒木）

#### 《将来の映画は》

☆終盤になり、放送系の参加者から、学生の諸君は 8K の映像を見たことがあるのか？という質問が出た。

☆学生：見たことはない

☆NHK の技研に行けば見せてもらえるから、ぜひ見てほしい。8K の時代になると、巨大なスクリーンの世界になり、映画やテレビのような、「フレーム」という概念が無くなるに違いない。テレビでも映画でもない、全く新しいメディアが誕生するのだ！。

（注：NHK のイメージする 200 インチ程



005- 時間がオーバーするほどの盛況ぶり

度の画面は巨大映像とは言わない。まして100インチ程度では8Kはおろか4Kも必要ない。荒木)

(注:4Kですら、20m以上の巨大映像になって初めてその優位性が判る。荒木)

☆筆者は古いので、映画はまずフレームありき、フレームが無くては映画であり得ないと思うが…。

☆映画はテレビの誕生以来、テレビとの差別化の歴史であった。スクリーンを横長にして、さらに大型化を進めるために、多くの大型スクリーンシステムの開発を続けてきた。アイマックスがその最終的な姿だろうか。

最近では、テレビが大型スクリーンを追及するようになり、8Kに至っては、65mmフィルムの「アイマックス」をイメージしているようで、アイマックスの後を追いかけているように感じる。

ただし両者が異なる点は、8Kの将来は、生中継も可能になるだろうが、アイマックスには不可能なことだ。なにか因果めいたものを感じる。

#### 《終わりに》

どのような分野でも、若い才能というのは素晴らしいことで、背伸びをしながらも、目標に挑戦しているようすが印象的だ。

テレビ以前からの古い映画ファンである筆者にとって、今回のシンポジウムは、若い才能と学生の考え方に接することができて、大変貴重な機会であった。

観念的で抽象的なテーマは、映画化にとって最も難しい題材であり、技巧的な要素が必要だと思う。巨匠と言われる監督で、難解な作品を残した人も、若い頃には解りやすく売れる映画を作っている。

今回のテーマは「4Kは使いこなせたか？」であるが、F65という最高級の4Kカメラを、オペレーション的には使いこなせたのだと思う。

しかし、この4Kカメラを、今回のオムニバス映画で、4Kならではの映像表現のために使いこなしたかと言えば、それは疑問だ。作品の上映映像を見ても、たしかに解像度は良いと思うが、これがもう少しグレードの低いカメラで撮っても、この作品の映像効果としてはあまり変わらないと思う。

映画というのは、小説や絵画のように一人のできる芸術ではない。撮影から興業まで多くの人と費用がかかるので、売れなければ成り立たない。学生諸氏は、たとえ実習作品でも、金を払って観てもらえる映画を目指してほしい、自己満足では誰も見てくれない。

今回思いついたのだが、藝大はF65という世界最高のDシネカメラを2台も導入したのだから、このカメラのイメージをPRする「デモ映像」を、学生チームのコンペ形式で競作したらどうだろうか。ソニーさんに製作費の一部を提供してもらって…。盛り上がるに違いない。

人々に感動を与える映像制作という、素晴らしい道を目指す学生諸氏の今後に、大いなる期待を寄せたいと思う。

Syuichi Nakayama  
日本映画テレビ技術協会名誉会員